

2021年3月7日（日）「適切な時とふるまい」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 8:1-5

- 1 誰が知恵ある者でありえよう。誰が言葉の解釈を知りえよう。知恵はその人の顔を輝かせ、その顔の陰しさを和らげる。
- 2 私は言う。神との誓いのゆえに、王の言葉を守れ。
- 3 王の前から慌てて立ち去るな。悪事に関わるな。王はすべてを思いどおりにするのだから。
- 4 王の言葉には権威がある。誰が王に「何ということをするのか」と言えよう。
- 5 王の命令を守る者は悪事を知らない。知恵ある者の心は時と法をわきまえる。

《新改訳 2017》伝道者の書 8:1-5

- 1 知恵のある者とされるにふさわしいのはだれか。物事の解釈を知っているのはだれか。人の知恵は、その人の顔を輝かせ、その顔の固さを和らげる。
- 2 私は言う。王の命令を守れ。神への誓約があるから。
- 3 王の前から慌てて出て行くな。悪事に荷担するな。王は自分の望むままを行うから。
- 4 王のことばには権威がある。だれが、王に「何をするのか」と言えるだろうか。
- 5 命令を守る者はわざわざを知らない。知恵ある者の心は時とさばきを知っている。

【序論】

先週は（例年とはずいぶん違う形にはなりましたが）定期教会総会が持たれ、2020年度の活動報告と2021年度の活動計画が承認されました。総会は「教会政治」という事柄を最も考えさせられる時であり、教会もまた法的な秩序の下で活動していることを認識させられます。ただ、教会における宗教活動は「聖俗」で言うところの「聖」（神）に属しているものであり、私たちは「神の意思を如何に実現していくか」ということを専ら考えて教会形成をしているのです。ただ、神の支配は教会の中だけにしか及んでいないかという、そうではありません。神はこの世（俗なる世界）に支配者をお立てになり、各国の政治体制に基づいて秩序を保たせておられます。今日の箇所の後半では、権力者の前で臣民が如何にふるまうべきかが教えられています。その状況は地域社会によって適用の仕方が大きく変わってくるかもしれません。絶対君主制を執っている国と議院内閣制を執っている国とでは、国民の服従意識がかなり違うと思われるからです。しかし、聖書が一貫して語っている真理は一つであるということをおきたいと思います。結論を先取りするようではありますが、それは「神がお立てになった権威に従う」ということです。

## 【本論】

今日の箇所は以下のような構造になっています。

### A. 知恵なき結果

- ①知恵ある者の不在
- ②神に依らなければ物事を解決できない人間
- ③誰にも「顔の陰しさ」を和らげることはできない

### B. 更なる知恵の探求：「権力者との平和な関係の構築」

- ①神に立てられた権力者
- ②臣下にふさわしいふるまい
- ③ふさわしい時と正しい行動

### A. 知恵なき結果

**誰が知恵ある者でありえよう。誰が言葉の解釈を知りえよう。知恵はその人の顔を輝かせ、その顔の陰しさを和らげる。(8:1)**

本節は2～5節の内容とやや乖離<sup>かいり</sup>しており、どのような位置づけで読むべきかの判断が難しいところです。一般的には二つの可能性が考えられます。

- (1) 7章全体（知恵とは何か）のまとめ
- (2) 8章2節以下の内容（王の前でのふるまい）の前置き

私自身が繰り返しこの節を読んでみたときに浮かんできた著者の表情がありました。それは、人間全般に対して希望を持つことができず、ハァーっとため息をついているコヘレトの顔です。7章の終わりを振り返りますと、男も女も罪深く、常に他人に罪をなすりつけて生きている存在であるという結論が置かれていました。その文脈上で、コヘレトは「知恵ある者はいない」と言っているのでしょうか。1節は三つの内容に分かれています。いずれも皮肉に満ちています。

①「誰が知恵ある者でありえよう」。無論コヘレトの念頭にある答えは「皆無」です。人は皆道に迷い出ている。「私たちは皆、羊の群れのようにさまよい、それぞれ自らの道に向かって行った」（イザヤ 53:6）。人は誰もが「愚かさ」を隠して生きている。自分の心の内を知られて平気な人などどこにもいない。まことの知恵は神にのみ属する。

②「誰が言葉の解釈を知りえよう」。「解釈」（ἑρμηνεία／パーシェル）と訳された言葉は、別の箇所では「夢の解き明かし」と関連する意味で用いられています（創世記 40:5、

ダニエル 2:4)。この解き明かしは、神から特別な英知を賜ったヨセフやダニエルによってなされました。それによって未来に起きる出来事が明かされていった（問題が解決された）。しかし、コヘレトは人間自身にはそれはできないと言います。神に依らなければ、人は何事も解決することができないと。

③「知恵はその人の顔を輝かせ、その顔の陰しさを和らげる」。これまでの話の流れから試みて、コヘレトの朗らかな顔など到底思い浮かばないでしょう。彼はここで、人間には自分の人生の悩みを自らの力で取り除くことはできないと言っているようです。そもそも知恵ある人などいないのだから。誰もが罪深く、互いに傷つけ合っている。真に人の顔を輝かせることができるのは、神以外にはおられない。

## B. 更なる知恵の探求：「権力者との平和な関係の構築」

ところが、ここまで人間に幻滅しても尚、コヘレトは知恵の探求を諦めません。そして、知恵ある生き方として「権力者との平和な関係の構築」を提唱します。この「新しい生き方」は、信仰を持つことによって（神との関係の中で）構築されていくのです。

### ①神に立てられた権力者

**私は言う。神との誓いのゆえに、王の言葉を守れ。**（8:2）

ここには翻訳上の厄介な問題が隠されていますが、話の複雑化を避けるために簡潔にご説明します。「私」(אני／アーニー) という代名詞が冒頭にポンと置かれていて、述語動詞が何もないので、訳に困ってしまうのです。あれこれ言葉を加えて解決しようとする学者もいますが、要するにコヘレトは「私は次の助言を与えよう」「私の見解は以下の通り」と、読者の注意を向けさせているのだと思われます。

彼が伝えようとしていることは重要です。神の民は、俗世界を支配する王であったとしても、その人が神によって立てられた存在だと認め、その命令を守るべきだということが言われている。王は人間であるけれども、その人をお立てになったのは神なのだ。信仰者が権威を尊重することは、実は神に従うこととつながっているというのです。

この教えは、コヘレト独自のものというわけではありません。預言者エレミヤ（エレミヤ 29:4-7）もパウロも異口同音に強調していることです。

**人は皆、上に立つ権力に従うべきです。神によらない権力はなく、今ある権力はすべて神によって立てられたものだからです。従って、権力に逆らう者は、神の定めにも背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くこととなります。**（ローマ 13:1-2）

このことは、国家が定めた制度に原則として従うべきことが教えられているでしょう。

## ②臣下にふさわしいふるまい

王の前から慌てて立ち去るな。悪事に関わるな。王はすべてを思いどおりにするのだから。王の言葉には権威がある。誰が王に「何ということなされるのか」と言えよう。(8:3-4)

コヘレトが思い描いている一つの状況があります。王に直接的に仕える者(ブレーン)が、王に対して何らかの「良い」と思われる提案をしたとしましょう。ところが、王はその提案が気に入らず、退けてしまったというシナリオです。そのようなとき、その臣下は王に対して怒りを燃やしたり、論じ合ったりしてはならないとコヘレトは言います。「立ち去る」とは、ここでは「不満や不忠」の表現であり、王に敵対することを意味するでしょう。そのような態度は危険であり、場合によっては命を失うことになるかもしれない。コヘレトが想定しているのは強大な権力を握る支配者であり、誰も言い逆らうことのできないような状況です。現代日本の状況とは違いますが、広く捉えるならば、国家が定めた制度に逆らうこととつながってくるでしょう。

## ③ふさわしい時と正しい行動

王の命令を守る者は悪事を知らない。知恵ある者の心は時と法をわきまえる。(8:5)

「悪事」とは「喜ばしくない結果」を指すでしょう。先ほどのローマ 13 章の聖句には続きがあります。

実際、支配者が恐ろしいのは、人が善を行うときではなく悪を行うときです。権力を恐れずにいたいと願うなら、善を行いなさい。そうすれば、権力から褒められるでしょう。権力は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権力はいたずらに剣を帯びているわけではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるからです。(ローマ 13:3-4)

敢えて法に逆らうことをして罰せられても、文句を言うことはできず、証にもなりません。信仰者は「神に仕える者」として、世の制度に従うべきだと言われています。

「上に立てられた権威」を敬ったことで模範となる人物が旧約聖書に出てきます。最近私は、聖書通読でダビデの箇所をずっと読んでいて、改めて彼の生き方から多くを教えられました。彼は、正当な理由なく自分の命を付け狙うサウル王を、たとえ殺せる状況が訪れたとしても、断じて手出しをしませんでした。ただひたすら、審きを神の御手に委ねていたのです。このダビデの生き方は、5 節後半の「時と法をわきまえる」という内容を体現しています。独裁者の前で苦しむ国民がいます。しかし、その王の統治も永遠ではなく、彼は神から一時的に権威を借りているに過ぎません。その行ないに応じて神はふさわしい時に彼の命を取り、その後、永遠の審判の座で正しく審かれるのです。この神の御手に委ねる生き方をコヘレトは「知恵」と呼んでいます。

## 【展開】

しかしながら、真の服従とは盲目的な無抵抗を意味してはいません。王の命令とあらば、不正、暴力、殺人、偶像礼拝を行なってよいかというと、そうではないのです。国家権力でさえ、私たちから信仰を奪うことはできない。信仰者は地上の権力よりも上の存在である神に最終的に聞き従うことができます。当団体が定めている『基範』の中には、このことを明記している箇所があります。

**第6条 当センターの宗教活動上の原則は、次の通りとする。**

- (1) 聖書に基づくこと
- (2) 信教の自由を尊重すること
- (3) 憲法および法律を遵守すること
- (4) 暴力その他の犯罪行為および違法行為を排除すること
- (5) 不正不当な要求を斥けること
- (6) パワーハラスメント、セクシャルハラスメントその他のハラスメントを許さないこと
- (7) 聖書信仰を基礎にした社会的正義の実現を目指すこと

ここでは意図的に「聖書に基づくこと」「信教の自由を尊重すること」が「憲法および法律を遵守すること」の上に置かれています。これは、神の法こそが私たちにとって最上位に置かれているということの証です。その上で、キリスト者はこの世の法に従うという原則を抱いて生きているのです。

## 【結論】

今日の箇所ではコヘレトが教えている「知恵」とは、この世の権力に従うことを通して神に従うということです。もちろん彼らも私たちと同じように欠けある人間ですが、神に立てられた器として尊重される必要があります。そして、知恵の中の知恵とは、自らの手で復讐をせず、神の「時と法」に委ねて、自らの行動（ふるまい）を選択していくことです。それは、権力に対してだけでなく、私たちの身近な存在に対しても然りなのであります。

## 【祈り】

無から有を創造し、すべてのものの活動に秩序を与え給うた、天の父なる神様。大宇宙があなたの御手の中で動いているその一部として、地球における私たち人間の営みがあります。神の法則に基づいて、人間にはその秩序を管理することが求められています。その秩序に歪みがあるとするならば、それは人の罪ゆえでしょう。神の国の平和が地に現されていくことを願います。そして、すべての国家がそのことを目的として歩むことができるように、為政者のためにも祈ります。主がそのためにお立てになった人々をふさわしく用い、彼らもまたあなたを認め、国民もあなたを知ることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
万物の創造主にして導き手であり給う、父なる神の愛、  
自らこの世の秩序の下に生き、律法の心を行なう道を示し給うた、主イエス・キリストの恵み、  
この世の法を重んじるとともに、神の法を常に最高位に置かせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。